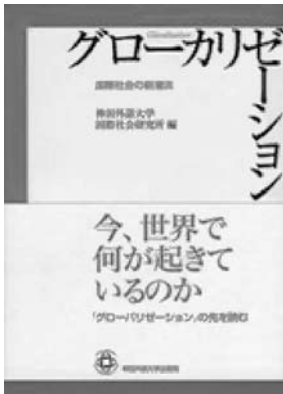


研究所活動報告（2009 年度）

【出版・啓蒙活動】

『グローカリゼーション—国際社会の新潮流』

2009 年 4 月 21 日に神田外語大学出版局より、本研究編『グローカリゼーション—国際社会の新潮流』が刊行された。本書は、本学のオムニバス講座「国際社会がみえてくる」（水曜・5 限）のテキストとしても使用されている。概要と内容は次の通りである。



【編者名】 神田外語大学国際社会研究所

【頁数】 256 頁

【定価】 2,310 円(本体 2,200 円+税)

ISBN978-4-8315-3000-4 C1036

【発行所】 神田外語大学出版局

【発売元】 (株)ぺりかん社

【装 幀】 菊地信義

〈内 容〉 急速に進展した「グローバリゼーション」(globalization) は、世界各地に「ローカリゼーション」(localization) という波を呼び起こした。この二つの波が、ある場合には反発し合い、ある場合には融和・共存しつつ、同時並行的に起きてい

る状態を「グローカリゼーション」(glocalization)とよぶ。今、世界で何が起きているのか、いったい何が問題で、どのように理解すればよいのか。複眼的・多角的視点から、その核心に迫る。

大学 NEWS 『『グローカリゼーション 国際社会の新潮流』出版のお知らせ』(2009年4月22日)
神田外語大学 <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/news/report305.html?t=1245770670992> より

目次(執筆陣、本学専任教員)

- 第Ⅰ部 グローバルからグローカルへ
 - 1章 物語：縮む「地球」と膨らむ「世界」(和田純)
 - 2章 ITの発達とグローバリゼーション(中山幹夫)
 - 3章 戦争とメディア・リテラシー(永井浩)
 - 4章 今、世界経済に何が起きているか(小菅伸彦)
 - 5章 グローバル・エコノミーと企業経営(仲野昭)
 - 6章 国際ビジネス取引と英米法(福田守利)
 - 7章 グローバル化する海洋環境問題(飯島明子)
 - 8章 人口問題と国際社会の対応(高杉忠明)
 - 9章 「国際社会」とは何か(青山治城)
- 第Ⅱ部 グローカリゼーションの磁場
 - 10章 日本・中国・韓国のナショナリズム(濱中昇)
 - 11章 ナショナリズムと戦争(土田宏成)
 - 12章 現代中国を読む(興梠一郎)
 - 13章 豊かな国アメリカの貧困問題(黒崎真)

- 14章 グローバル化時代の言語政策（矢頭典枝）
- 15章 東南アジアのグローカリゼーション（岩井美佐紀）
- 16章 世界史の中の東南アジア（エイチャン）
- 17章 台頭する新興国ブラジル（子安昭子）
- 第Ⅲ部 国家の枠組みを超えて
- 18章 東アジアの未来を考える（阪田恭代）
- 19章 イスラーム教とグローバリゼーション（菊地達也）
- 20章 多様な資本主義のかたち（戸門一衛）
- 21章 越境するカネ・モノ・ヒト（柳沼孝一郎）
- 22章 日本在住外国人労働者に関する一考察（高木耕）

【研究プロジェクト活動】

共同研究プロジェクト『外国人労働者と多文化共生社会の構築』

わが国の人口は、2004年に1億2279万人とピークを迎えたあと減少が始まり、それに伴って労働力人口も2006年の6657万人から2017年までに440万人減少し、2030年には1073万人減少すると推計されている。今後深刻化する労働力不足を補い、安定的で持続的な経済成長を維持するには、質の高い労働力・人材確保が不可欠であり、とりわけ地域や業種によって人材確保に苦慮する企業を支援していくことは緊急の課題である。すなわち、国際化を図る日本の中小企業が必要とする人材を確保し、日本に定住できるようにするため、中小企業への就職を希望する外国人留学生を対象にした支援策を拡充・展開すべき時に来ているのである。とりわけ、わが国で今後深刻な労働力不足が想定される、製造、農林水産、サービス、看護・福祉などの

分野で不足する労働者の規模の実態を正確に把握し、外国人労働者によってこれを補う方策を真剣に議論すべき時に来ていることは論をまたない。

本年、政府は大学などで学ぶ留学生を、現在の12万人から2020年をまでに30万人にまで増やすことをめざす「留学生30万人計画」の骨子を策定した。政府が留学生受け入れ政策を打ち出すのは、1983年に「留学生受け入れ10万人計画」を掲げて以来25年ぶりのことである。大学や大学院の国際化が進み、研究が活性化すれば、科学技術の振興や産業の国際競争力向上にも役立つ。また我が国と諸外国との懸け橋となる優秀な人材を育てることは、国際社会で日本が発言力を増す上でも重要なことである。大学と協力企業で「ビジネス日本語」や「企業実習」など企業側のニーズに合った専門教育プログラムを用意し、これを受講した留学生は企業が原則採用するという仕組みが提示されている。こうした産学連携をこれまで以上に強化していくことも必要である。海外での日本語教育の推進や、日本留学希望者のための海外の窓口一元化なども、30万人計画の重要な柱である。こうした計画の早急な具体化に向けて、さらに議論を深めていかなければならない。

一方、外国人労働者を送り出すアジア諸国においても、最近日本との間で締結されたFTA(自由貿易協定)やEPA(経済連携協定)によって、わが国労働力市場へのアクセス拡大の期待が非常に高まっている。EPAなどの二国間協定を通じて、早急に受け入れ可能な業種や職種、人数を定めてゆくことが当面の重要な課題となっている。

神田外語大学国際社会研究所は、2008年4月の開設以来、千葉県庁や千葉県企業庁、教育庁、千葉県商工会議所、ちば国際コンベンションビューロー関係者と上記の問題について会合を重ね、聞き取り調査を行ってきた。その結果、外国人労働者問題、とくに留学生の中小企業への就職問題について千葉県庁ならびに県下の企業が極めて高い関心を持ち、現実にその問題について取り組み始めていることが確認できた。加えて、千葉県側は、外国語大学

である本学と提携して、外国人労働者受け入れと多文化共生社会の構築に向け、協力して取り組んでゆきたいとの意向を有している。

こうした要請を受けて、本研究では、少子高齢化・人口減少が急速に進行する日本の労働環境を背景に、外国人留学生受け入れ問題に焦点を絞ってその実態を明らかにしてゆきたい。

2009年度は本学のパイロット研究助成を受けることができたため、資料収集及び予備調査を行った。

（高杉）

【社会貢献活動】

『千葉市民文化大学レクチャー・シリーズ：国際関係論基礎』

2008年度に引き続き2009年度も、本研究所の社会貢献活動の一環として、千葉市民文化大学国際文化学科の授業に本学の専任教員と非常勤講師を派遣し、「国際関係論基礎」（6回シリーズ）と、「オバマ政権の対外政策を考える」（5回シリーズ）について、オムニバス形式のレクチャーを行った。

日時：2009年5月～6月まで毎週金曜日午後2時～4時

場所：千葉市民文化センター5階セミナー室

コーディネーター：高杉忠明・本学英米語学科教授

「国際関係論基礎」では、複雑化・多様化する現在の国際社会の特徴を客観的かつバランス良く理解するために、国際政治学、地域研究、経済学、歴史学などを専門とする本学教員がそれぞれの専門的立場から以下のようなレ

クチャーを行った。①国際関係をどうみるか?—国際関係理論の世界(本学国際コミュニケーション学科教授・阪田恭代)②世界的金融危機と国際関係(本学国際言語文化学科教授・小菅伸彦)③国際社会の形成と発展(本学英米語学科教授・高杉忠明)④地域研究と国際関係(本学国際言語文化学科専任講師・高木耕)⑤歴史研究と国際関係(本学非常勤講師、〈財〉渋沢栄一記念財団研究部長・木村昌人氏)⑥国際社会の将来—ヨーロッパの事例を中心に(本学国際コミュニケーション学科教授・戸門一衛)。約150名の学生が聴講したが、その熱心な受講態度と高い学習意欲に感銘を受けた。

(高杉)

『千葉市民文化大学レクチャー・シリーズ：オバマ政権の対外政策を考える』

日時と講師：黒崎真・本学英米語学科准教授(7月17日)、柿崎正樹・ユタ州立大学博士課程、ユタ大学非常勤講師(7月24日)、高杉忠明・本学英米語学科教授(7月31日、8月28日、9月4日)

場所：千葉市民文化センター5階セミナー室

2001年の同時多発テロを機に「テロとの戦い」に転じたアメリカのブッシュ共和党政権は、イラク戦争の失敗などで国民から不評を買い、2008年米大統領選挙では変革を唱えて高い支持を得たオバマ氏が黒人初の大統領として選挙に勝利した。政権発足後半年が経過したが、オバマ政権は世界的金融危機への対応に追われ、なかなか明確な外交方針を打ち出せないでいる。しかし、2009年4月6日、オバマ大統領は就任後初となる外遊先でのスピーチ(チェコ・プラハ演説)を行い、「核兵器の無い世界」の実現に向けて米

国が採るべき対外政策上の基本方針が打ち出された。ブッシュ時代の一国行動主義に別れを告げ、多国間協調主義の下に歩み出したオバマ政権ではあるが、ブッシュ政権が残した「負の遺産」にどの様に対処してゆくのか？

この講座では、最初の講座で黒人初の大統領の歴史的意義について論じ、2回目の講座で米国の中東政策の経緯ならびにオバマ政権のアフغانستانやイラク戦争への対応の仕方を分析し、3回目から5回目までの講座において、オバマ大統領が核廃絶論を提唱した真の意図は何なのか？さらには、それが東アジア政治や米ロ関係、米中関係、そして日米関係にどのような影響を与えるのか？また非核三原則や日米安保条約に依拠する日本の外交はいかにあるべきか？などについて分析・検証した。質疑応答では、受講者から鋭い質問が出て、これらの問題に対する関心の深さが明らかになった。

（高杉）

『子ども大学開校記念シンポジウム・モデル授業』

日時：2009年11月14日（土）午前10時～午後4時

場所：本学キャンパス

2010年に開講を予定している「子ども大学」開校に先立ち、幕張地域の小学校・中学校の児童生徒、保護者、教職員を招待し、シンポジウムとモデル授業を開催した。「子ども大学」とは子ども達の知的好奇心を刺激し、学ぶことの楽しさを体験することで様々な未来の夢を培う場である。本学教職員、行政、市民、教育の関係者や保護者の協力を得て、子ども達の疑問や関心事についてわかり易く講義を行った。地域住民が期待するプロジェクトであることの再確認が得られ、かつ開学の課題が明確になった。

シンポジウムの詳細

午前の部(午前10時～午後12時30分):趣旨説明とパネルディスカッション(本学2-301教室)

開校の趣旨と挨拶:永井浩副校長(本学国際言語文化学科教授)

スライドショー「ドイツの子ども大学」:酒井一郎・子ども大学かわごえ事務局長

パネルディスカッション「真の学力とは」:パネリスト・石井米雄校長(本学前学長)、遠藤克弥(子ども大学かわごえ学長)、裕茂樹(千葉市打瀬中学校長)、宇川光男(千葉市美浜打瀬小学校教務主任)

午後の部(午後1時～4時):モデル授業3コマ(本学2-301教室)

授業Ⅰ「なぜ世界にはいろいろな言葉があるのか」石井米雄(本学前学長)

授業Ⅱ・Ⅲ「なぜ飛行機は空を飛ぶことができるのか」・「飛行機飛ばし実習」望月修(東洋大学工学部教授)、

後援:千葉市教育委員会、(財)ちば国際コンベンションビューロー、幕張新都心賑わいづくり研究会

(佐々木)

【講演会】

『Go Global! 外交官講演会シリーズ』

国際社会研究所は日本外交協会の協力を得て「外交官講演会シリーズ」を企画、現役あるいは退官した大使経験者を招き、国際協力、地球環境、オバマ政権と日米関係、アフガニスタンの現状をテーマにして講演会を開催した。

演題：「国際協力とは何か？」

日時：2009 年 6 月 25 日（木）午後 4 時 50 分～6 時 20 分

場所：本学 2-301 教室

講師：五月女光弘・NGO 担当大使・前外務省参与

司会：高木耕・本学国際言語文化学科専任講師

内容：国際協力テーマは学生の関心が高く、卒業後の進路の 1 つとして真剣に考えている学生が多い中、バングラデッシュで国際協力 NGO の組織で活躍する日本人女性の映像などを例に示し、具体的に国際協力に係わる現場の仕事と将来の進路の関係についてアドバイスを得た。参加者は学生ならびに地元の社会人や行政関係者（チバ国際コンベンションビューロー等）約 150 名で、講師と聴衆との間で活発な質疑応答がなされた。

演題：「地球環境とグローバル経済」

日時：2009 年 11 月 5 日（木）午後 4 時 50 分～6 時 20 分

場所：本学 4-301 教室

講師：西村六善・内閣官房参与（地球温暖化問題担当）

司会：小菅伸彦・本学国際言語文化学科教授

内容：豊かな日本が地球環境維持に果たす役割を具体的に解説、アフリカ等の飲料水不足、地球温暖化防止に日本の役割が大きく国際的に期待されている。日本人に見えない貧困や飢餓に喘ぐ国への支援のあり方、地球環境問題を討議した洞爺湖サミット会議の開催国責任者の役割などについて聞く機会を得た。参加者は学生や地元の社会人、行政関係者（チバ国際コンベンションビューロー等）約 140 名で、講師と聴衆との間で活発な質疑応答がなされた。

演題：「オバマ政権誕生1年の軌跡と日米関係」

日時：2009年12月7日(月) 午後4時50分～6時20分

場所：本学4-301教室

講師：斉藤邦彦・元駐米国大使

司会：高杉忠明・本学英米語学科教授

内容：米国駐在大使で日米外交に携わり国際外交で日米関係を正常に維持していくことの重要性を外交の立場から解説、また、オバマ大統領の核廃絶に対する決意が大使の講演から学生に伝わった。オバマ政権の脆さについて米国政界に人脈ある大使の興味ある話が聞けた。学生や地元の社会人、教育・行政関係者(チバ国際コンベンションビューロー等)約140名が参加し、講師と聴衆との間で活発な質疑応答がなされた。

演題：「アフガニスタン・パキスタンの現状と日本の役割 “若い世代に期待したいこと”」

日時：2009年12月18日(金) 午後3時10分～4時40分

場所：本学2-301教室

講師：吉川元偉・アフガニスタン・パキスタン支援担当特命全権大使、元駐スペイン大使

司会：高杉忠明・本学英米語学科教授

内容：外務省や外交官、そして大使としての業務が紹介され、次に、日本のアフガニスタン・パキスタン支援の必要性を講演。その中で、アフガニスタンの国情からみた9・11テロの考察、欧米諸国におけるアラブ人社会をめぐる緊張など、9・11テロ後の国際社会の変容について紹介。オバマ政権のアフガニスタン増派にみるディレンマ、就任当時の高支持率が低下する苦悩、そして日本に求められる役割などについて、

外交官ならではの現場からの生々しい臨場感のある講演を聴き、国の安全保障を考えるきっかけになった。参加者は本学の学生や地元の社会人、教育・行政関係者（チバ国際コンベンションビューロー等）を含めて約160名、講師と学生の間で活発な質疑応答がなされた。

（佐々木）

【国際人養成プロジェクト】

『外務省在外公館派遣員試験対策支援』

国際人養成プロジェクトの一環として外務省在外公館派遣員試験対策支援のための勉強会を開催した。当勉強会は、正式には昨年（2009年）10月1日からであるが、以前よりこの制度と試験に関する学生からの相談は多く、外務省外交のサポート役として本学で学んだ語学を生かし、海外の大使館・総領事館・政府代表部で働くことに学生達の興味と関心は高いようである。これまでも（2006年まで）毎年1～2名の合格者はいたようだが正確な在外公館派遣員の実態把握はできていない。またこの試験に関して詳細は一切公表されていないため、志望する学生達の相談に対して十分な説明と指導もできない状況であった。こういった状況に鑑み、大学として何らかの具体的対策を講じなければならないと考え、主に元派遣員経験者及び受験者から詳細な業務内容、試験問題内容、面接の傾向等々ヒヤリングし、およそ2年間かけてある程度の中身についてまとめることができた。

勉強会はそのまとめた内容に基づいて行っており、これまでの希望登録者は在学生と卒業生を含め50名を超えている。常時勉強会には15～30名が参加して原則毎週金曜日の午後5時～7時30分頃まで行っており、参加者は熱心に在外公館派遣員を目指して頑張っている。この勉強会に関わった受講

生で、今年(2010年)3月に赴任する予定者を含めるとこれまでは以下のとおりである。

- 杉山梨里 国際コミュニケーション学科 2009年3月卒 在バルセロナ総領事館(スペイン語) 期間 2009年3月～2011年3月
 - 柳澤哲也 国際コミュニケーション学科現役4年生(2009年3月現在休学中) 在アブダビ大使館(英語) 派遣期間 2009年9月～2011年9月
 - 加藤光樹 スペイン語学科現役3年生(2009年3月現在) 在ドミニカ共和国大使館(スペイン語) 派遣期間 2010年3月～2012年3月
 - 高橋亮大 国際言語文化学科 2010年3月卒 在サンパウロ総領事館(ポルトガル語) 派遣期間 2010年3月～2012年3月
 - 小林野絵 国際言語文化学科 2009年3月卒 在インドネシア大使館(インドネシア語) 派遣期間 2010年3月～2012年3月
- 以上5名である。

2010年1月22日(金)、今年度合格者のうち赴任を控えた3名(加藤、高橋、小林)と学長並びに先生方との対談が行われた。3名はそれぞれインドネシア(在インドネシア大使館)、ブラジル(サンパウロ総領事館)、ドミニカ共和国(在ドミニカ共和国大使館)に赴任予定だが、赤澤正人学長も在ド



ミニカ共和国大使館で特命全権大使として赴任されていた経験もあり、現地の事情やドミニカ日本大使館が兼轄しているハイチの地震災害支援における大使館員の役割等についても詳しくお話を頂いた。また、本研究所の高杉忠明所長、本学の柳沼孝一郎・スペイン語学科教授、小菅伸彦・国際言語文化学科教授からもそれぞれ専門の立場から赴任予定である各国について貴重なアドバイスを頂戴した。今後3名は外務省内で研修を受けた後、3月上旬には各赴任地に出発する。赴任後も様々な現地情報や活動報告をしてくれるものと期待しているが、それ以上に派遣員として様々な体験を積み、一層成長した姿で本学に戻って来てくれることを大いに期待したい。

●制度の概要

勉強会での派遣員制度と試験に関する説明の概要は以下のとおりである。

（1）外務省在外公館派遣員制度とは

外務省在外公館派遣員制度とは、1973年（昭和48年）6月以来外務省の委託を受けて国際交流サービス協会が「在外公館派遣員」の募集・選考を行っている制度で、年間2回（前期：5月上旬、後期：10月上旬）の募集を実施している。これまで同年に第1回派遣員を派遣し、現在197公館に270名を派遣している。派遣員の業務は世界各国の大使館・総領事館等で外務省外交のサポート役として、主に便宜供与・官房補佐・領事業務補佐などを担当する。

（2）大使館・総領事館・政府代表部の仕事

大使館は特命全権大使（原則）を長として、日本を代表する政府機関で相手国政府との交渉や連絡、政治・経済・文化などの情報の収集・分析を行い、またビザの発給や在留邦人の生命や財産を保護することも重要な任務である。

総領事館は総領事（原則）を長として、在留邦人の安全と保護を目的にその地域の在留邦人の保護、ビザや証明書の発行、情報収集、友好親善、国際

会議等の準備などを行うのが主たる任務である。

政府代表部は特命全権大使(原則)を長として、複数の国際機関に対して派遣元の国の政府を代表し、その国際機関の所在地に置かれる。国を代表して、国際機関での外交活動を行う点は大使館と同じだが、ビザの発給や自国民の保護といった領事業務は行わない(パリ、ニューヨーク、ジュネーブ、ブリュッセル等)。

●派遣員のステイタス 《待遇》について

派遣員は、概ね2年間、世界各地の在外公館へ派遣される(身分は国際交流サービス協会に属する)。詳細は次の通りである。

月額報酬：約24～30万円

住居費：US\$1,000上限(補助)

その他：渡航経費、社会保険、労災保険

旅券：公用旅券が発給される。

●派遣員の業務について

派遣員の業務は主に、以下の3つがあげられる。

①便宜供与：「アテンド」と呼ばれるもので、外務省内ではロジスティックを略し、通称「ロジ」と呼ばれる業務である。

* 空港への送迎、会議/視察等の随同行・案内

* 現地企業等の訪問調整

* 航空券/ホテル等の各種アレンジ

②官房補佐：会計担当官の補佐や文書作成・備品の管理を行い多種多様の業務に携わる。

③領事業務：ビザ(査証)発給、広報・文化活動の補佐をする。

●派遣員試験について

<受験資格>

日本国籍を有していること；高等学校卒業以上の者；普通自動車運転免許証

を保持する者

<試験内容>

○一次試験：5月と10月の年2回実施（東京、大阪、札幌、福岡）

内容：外国語（60分） / 教養（30分） / 日本語作文（45分） /
適性検査（30分）

○二次試験：一次試験の合格者を対象にそれぞれ6月と11月に実施（外務省内）

内容：外国語面接と日本語面接

外国語面接はネイティブと1対1、日本語面接は5（面接官）対1（受験者）である。

以上が制度と試験の概要である。正式な公表はされていないが試験については毎回60～70公館（65～75名）の募集に対して、現在は1,000名以上の応募者があるといわれている。また、派遣員経験者は帰国後外務省に残る者、大学院に進学する者、特殊言語能力を生かして赴任した国の現地企業や日本企業に採用される者、通訳・翻訳の道を選ぶ者、ホテル・旅行会社・その他等で採用される者と様々であるが、在外公館での2年間の経験は仕事上のキャリアとして見なしてくれる企業も多くなっている。従って今後、国際社会研究所としても在學生・卒業生を問わず希望者には出来る限りの指導と応援を継続して行きたい。

（久保谷）

『第1回 神田外語大学レシテーション（Recitation）大会』

英語による演説の朗読・暗唱を通して、自然な英語を話す練習、スピーチの練習を行うと同時に、演説の社会的・文化的背景をも理解することを目的

としてレシテーション大会を実施した。本学最初の試みであり、2009年度は米国オバマ大統領が行った代表的な演説の中から4つの題材(2004年夏の民主党全国党大会での基調演説より2ヶ所、2008年11月4日の大統領選挙直後に行った勝利演説より1ヶ所、2009年4月のプラハにおける「核なき世界」演説より1ヶ所)を選び、レシテーション大会を実施した。参加者は、上記4つの中から1つを選び、演説の名調子を聞き、単なる物まねとして朗読・暗誦するのではなく、その演説の背後にある国際情勢や社会的問題についても勉強し、理解を深めた上でレシテーションを行った。応募者は37名いたが、音声録音テープによる予選審査を経て、7名が本選へ進んだ。

日時：12月12日(土) 午前10時30分～午後2時

場所：本学7号館2階クリスタル・ホール

共催：英米語学科、異文化コミュニケーション研究所

実行委員：高杉忠明(委員長)・本学英米語学科教授、関屋康・同教授(学科長)、松井佳子・同教授(異文化コミュニケーション研究所長)、黒崎真・同準教授、柴原智幸・同専任講師

審査委員：関屋康(委員長)、伊藤泰子・本学英米語学科専任講師、柴原智幸・同専任講師、マイケル・シャンリー・本学ELI専任講師

本選の結果

- 1位 永井理香(英米語学科4年) プラハにおける「核の無い世界」演説
- 2位 櫻井菜奈(英米語学科1年) 2004年全国党大会基調演説
- 3位 黒崎翠(国際コミュニケーション学科4年) 同上

大会に向けて柴原智幸講師が、学生達の指導を担当した。その際の指針ならびに実際のトレーニング、今後の課題については下記の通りである。

<レシテーション大会 練習の詳細>

1 指導の指針

- 音素レベルの発音の完成。文章レベルでの音声変化の理解と実践
- 単なる「物まね」ではない、意味を重視した暗唱
- 「聞き手に伝える」ことを重視した暗唱
- 徹底した反復練習

2 実際のトレーニング

2-1 10月後半 目標：音素レベルの発音の完成

- 数詞1～10の発音トレーニング

日本人が苦手な子音はLを除いてすべて1～10の中に入っている。このため、まず1～10までの音を完璧に発音できるようにトレーニングを行った。

- A～Zの発音トレーニング

数字の発音に続いて、アルファベットの発音訓練も行った。この際Lの音と破裂音系の音に特に注意した。

- ペアを組んでの発音チェック

「伸びを実感する」「指導者がいなくても、お互いから学びあう」ことに重点を置き、基本的に練習前にペアを組んでお互いの発音をチェックし、練習後に同じように相手の発音を聞いて、コメントさせた。

2-2 11月前半 目標：徹底した反復練習による音声変化の理解と実践

- 実際のスピーチを使ったシャドウイング

自分が担当するものではないものも、「オバマ氏の話し方を体得する」ということで取り組ませる。

- 背中合わせ音読

どうしても声が大きく出ない学生もいたため、同じスピーチの担当ご

とにペアをつくり、背中合わせに立って一文ごとに交代で読むようにした。こうするとお互いの声が聞きにくくなり、さらに他のグループも声を出している上に、CDも流したので、相当大きな声を出さないとパートナーに聞こえない。効果はかなりあった。

- 合宿（詳細は後述）

10月からの活動の復習と、大会に向けての予行練習を行った。

2-3 11月後半 目標：意味の重視。「物まね」からの脱却

- 内容に関する質疑応答

スピーチの内容に関して、意味が把握できない箇所などについて質問を引き出した。英文解釈的な文法解説も行った。また、背景知識に関しては、阪田先生と黒崎先生に全面的にご協力いただき、詳しい解説のほかに発展的学習のための参考文献なども示していただいた。

- 重要点の確認

各自が原稿を用意し、自分なりに重要だと思う単語の下に赤線を引き、そこを強調する形で読んだ。ペアを組んで作業の前後でお互いのパフォーマンスを聞き、聞きやすくなっていることを確認させた。

- 重要点の強調

重要だと思う単語の強調が不十分だったので、体の動きとシンクロするよう指導した。最初は手の動きだけだったが、効果が不十分だったので、ひざを使って体を上下することを教えた。かなりの改善が見られた。

- メッセージの確認

「ここでは、大統領は何が言いたかったか」「一言でいえば、何が伝えたいのか」という発問を繰り返すことを通して、伝えるべきメッセージを確認した。

- ペアチェックとコメント

お互いのパフォーマンスをチェックし、「良かった点」と「悪かった点（改善すべき点）」を率直にコメントさせた。後者が大切なことを強調。ただ、暗唱コンテストに限らず語学学習は長丁場になるので、スランプに陥ることもあることを指摘。そのようなときには「良かった点」を伸ばすことに力を入れるよう指導した。

- 自主的音読

練習会が始まるまでの間にも、自主的に音読をするように指導した。合宿参加者を中心に音読が広がった。

2-4 12月 目標：聞き手に伝えることの重視

- アイコンタクト練習

参加者全員が立ち、1人が前に出て暗唱。残る全員は、スピーカーからアイコンタクトがあった時点で着席。何度か実施したが、速やかに効果が挙がったので1週間ほどで終了した。

- 身振り手振りの矯正

ジェスチャーはメッセージの伝達を助けることもあるが、あまりそちらに気が行き過ぎると、暗唱よりもそちらに聴衆の意識が引き寄せられることを指摘。不必要なアクションを加える学生に対し、あくまで「語り」で伝達するように指導した。

- 物まねからの脱却を再度強調

練習会にほとんど来ていないが決勝に進出した学生に対し、「自分なりに重要だと思えることを見つけて、それを語りかけようとするように。オバマ氏とまったく同じ語り口にすることそのものにエネルギーを使いすぎないように」と指導。

- 大会の会場を使った練習

本番と同じ状況でひとりひとり暗唱させ、「聞き手に伝える」という

観点から問題がある点を細かなところまでチェックして指導した。

3 今後の課題

・練習会参加者を増やす

講義形式の、受身の練習会を想定していた学生が多く、多少集まりが悪かった。練習会に規定回数出席することを義務付けるのも、1つの方法かもしれない。

・合宿を早めに行う

早期に発音指導など基礎固めを行い、また反復練習を体験させるためにも、出来れば夏休みに1度合宿を行いたい。その後、本年度と同様に11月半ばにも合宿が行えれば、1回目の合宿では英語そのものに、2回目は意味に重点がおけるため、理想的である。

・「暗唱」の徹底

練習量の不足もあり、「音読」に近い学生も多かった。「暗唱コンテストを通した学習」という観点から言うと、途中でいくつか暗唱のチェックを行い、それも本選出場の際の付加ポイントにするなどのシステムが有効かもしれない。

・開催日と審査方法について

より多くの学生が参加出来るようにするため、2010年度の大会は平日にミレニアムホールで実施することも検討してはどうだろうか。また、「学生審査員制度」のようなものを設けて、数名にジャッジとして参加させてはどうだろうか。

4 合宿記

- ・11時。八王子の大学セミナーハウスに集合して、ラウンジで今後の予定を説明。今日は発音練習と音読をメインにする。明日の午前中の練習

中に、1人ずつ前に出て演説を朗読。全員からコメントをもらう。それが合宿の山場だと伝える。食堂にて全員で昼食。

- 13時からセミナールームで練習開始。まずは息・声・英語のウォーミングアップ。続いて発音。子音に気をつけて1から10までとAからZまでの発音にじっくり取り組んだ。それから内容的な質問。その後スピーチを音読させ、発音がわからない単語の読みを教える。続いて自分の担当するスピーチの、意味的に重要な部分をマークさせる。
- 16時ごろに、コーヒブレイクとチェックインなども行う。その後「The House That Jack Built」を使って英語の強弱のリズムに関して全員で練習。その後自分のスピーチを、意味に気をつけて強弱をつけて読むように指導。

しばらく練習した後、学生は疲れたようなので座らせて、どうしても読むのが難しい箇所を質問させ、読み方のポイント、とくにリエゾンと音の脱落などを中心に教える。その後、窓のカーテンを開けて学生を窓の外に向けて立たせ、きれいな夕日を見ながら音読させた。その間1人ずつスピーチを読ませた上でコメントをした。

ペアを組ませてお互いのスピーチを聞かせて「良い点」「悪い点」をコメントさせる。「悪い点」は直せば確実に全体的な底上げができるのだから大事だと伝える。ただし、長期にわたる語学学習でかならず訪れるスランプの時には「良い点」を伸ばすように努力すること。自分は自分自身にとって一番微妙なさじ加減がわかるコーチなのだから、スランプから脱したら、それがわかるはずであり、その時は、また自分の欠点と向き合ってがんばるように励ます。

さらに音読させ、難しいところに関する質疑応答をして18時。みんなで夕食。

- 20時に練習再開。1人ずつ先生役になってコーラスリーディングを行っ

た。少しずつプレッシャーのかかる環境でパフォーマンスを行うようにすると、本番でもあがらない旨伝える。みんな真剣に読んでいた。だいぶまくなってきた。21時半ごろから打ち上げ。

- 翌朝は9時から練習。いよいよ1人ずつのパフォーマンスだが、全員昨日と比べて格段の進歩を見せていた。ペア・コメントも良いものが続く。6人全員が終わった時点で10時45分ぐらいになっていた。合宿の総括を述べ、最後に発音練習を行って締めくくる。合宿初日と比べて、全く音が違う。学生も驚いたようで、発音の練習を行いながら、顔を見合わせて目で笑っていた。

(柴原、大野、高杉)